とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	太陽の子南砂2丁目保育園
施設所在地	東京都江東区
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

１．活動のテーマ

＜テーマ＞

様々な表現を用いて、形に表す（感触遊びを通して）

＜テーマの設定理由＞

（テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など）

普段の保育の中で、粘土や砂場遊びなど、感触に関する遊びに興味を持つ子が多いが、園庭がなく砂場に行く機会が身近でないため。
身近な物を使った感触遊びを通して、自由に表現したり、言葉で伝え合う楽しさを感じられるような活動を取り入れたいと感じた

２．活動スケジュール

感触遊びを楽しむ　4．５．６月
・砂場や粘土で遊ぶ。様々な感触を楽しむ姿から、スライム、寒天などの感触遊びを行う。

寒天作りを調べ子ども自身で作ってみる　7，８、９月
・寒天をもっとやりたいという声から、子どもたち自らが、寒天を作る。
・寒天を作る為の材料を調べ、３グループに分かれて、それぞれ作った。寒天が固まらず、再度３グループでなぜ固まらなかったのか考えたり、調べたりする。
・再度、調べたことをもとに作る。

小麦粉粘土で個々の作品をつくる　10．11.12月
・小麦粉粘土を作る。作る為の材料や量を調べて、一人一つずつ作る。
・乾いた小麦粉粘土を触ってみる。
・乾いた粘土に各自で好きな色で好きなように塗ったが、しばらくすると壊れてしまった。1月は、小麦粉粘土で形を作って色を塗る活動を取り入れた。

紙粘土でグループ作品作りをする　1月～
・紙粘土を用いて、触ったりにおいを嗅いだり、感じたことを言葉に出して友だち同士で話す姿が自然と見られるようになった。
・少人数のグループで紙粘土を使った作品を１つ作る活動へと繋げ、他者と協力したり意見を受け入れたり主張したり、と人間関係の広がりにも繋がった。（活動継続中）

３．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）

日常生活の中で、感触遊びで行った活動を振り替えられるよう掲示した。
・寒天の素　・お湯　・絵の具　・小麦粉　・油　・塩　・洗濯のり　・ホウ砂　・水

４．探究活動の実践

＜活動の内容＞

①食料品を使った感触あそび
・寒天や小粉など見な食材に触れ、素材ごとの感触の違いを全身で感じなから遊んだ。
・ちぎる、つぶす、こねるなどの操作を繰り返し、形や硬さ、変化に気付き、自分なりの感じ方を言葉や表情、動きぞ表現する姿が見られた。寒天が固まらなかったことに関して、動画をみて作り方を調べたり、固まりそうな氷や、冷蔵庫に入れるなどして試行錯誤する。

②身近なものを使った感触あそび
・砂やスライムなど、日常的に触れる素材を使いい、触った時の感覚や、手や道具で扱った時の変化をじっくり味わいながら遊んだ。

③ 他児と協力したり思いを伝え合う
・友だちと一緒に寒天を作ったり、乾いた小麦粉粘土に絵の具で色を塗ったりする中で、「こうしたい」「かして」「いっしょにやろう」など、自分の思いを言葉や身振りで伝えながら活動を進めた。
・一つの素材を共有し、試行錯誤を重ねることで、友だちの考えに気付いたり、協力して作る楽しさを感じる姿が見られた。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり＞

（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）

① 食料品を使った感触遊び
寒天や小麦粉に初めて触れたとき、子どもたちは「つめたい！」「ぷるぷるしてる」「なんかくっつく…」など、感じたままを言葉にする姿が多く見られた。
寒天が固まらなかった際には、「ゼリーみたいにぐちゃぐちゃしてる」「氷とか冷やす時間が少なかったのかな」と考えたり、作り方を見ながら保育者が「寒天の粉よく混ぜてるね」と言うと、「もしかしたら混ぜるのが少なかったかも」とグループで相談し合う姿が見られた。再度、寒天の量やお湯の量を調節し作り直すと「この前より固まってるね」「よく混ぜたからかな」とグループで固まったことを喜び合う姿が見られた。

② 身近なもので感触遊び
砂場遊びやスライム作りでは、「ドロドロになった！」「ながーくのびたよ！」と、変化を楽しみながら夢中で繰り返し触れる姿が見られた。友だちが新しい遊び方をしていると、そばに近付きじっと観察したり、真似をするなど、感触への興味が自然と友だちとの関わりへと広がっていった。保育者が「〇〇ちゃんのスライム、どう？」と橋渡しすると、互いの遊びを見せ合いながら、「やわらかいよ」「こっちはかたい」と、材料の量によって変わる感触の違いを言葉で伝え合う姿が増えていった。又、絵の具を入れる量によって、色が変わっていくことに気付き、「〇〇ちゃんのスライム綺麗だね」と褒めたり、言葉を交わしながら楽しむ姿が見られた。

5．振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

①感触遊びを継続して行うことで、子どもたちは“触る”という経験を通して、素材の違いや変化に気付き、それを自分なりの言葉や身振りで伝えようとする姿が少しずつ増えていった。初めは「つめたい」「ぷるぷる」など、その瞬間の感覚をそのまま表す言葉が中心であったが、回数を重ねる中で「さっきよりかたい」「こっちのほうがさらさら」など、比較したり、変化を捉えたりする表現へと広がっていったことから、感触への探究が深まっていることを感じた。また、友だちと一緒に取り組む活動を取り入れたことで、自分の気付きや思いを相手に伝えようとする姿が増え、言葉だけでなく、指差しや素材を見せるなど、多様な方法で関わろうとする姿が見られた。保育者が一方的に教えるのではなく、「どんな感じ？」「どうしてそう思ったの？」と問いかけることで、子ども自身が考え、表現する時間が生まれ、感触遊びが単なる“遊び”ではなく、感じる・考える・伝える経験へとつながっていった。今後も、子ども一人ひとりの小さな気付きやつぶやきを大切に拾いながら、感触を通して自分の思いを表現する力や、友だちと関わる楽しさを育んでいきたい。

② 身近なもので感触遊び

砂場遊びやスライム作りでは、「ドロドロになった！」「ながーくのびたよ！」と、変化を楽しみながら夢中で繰り返し触れる姿が見られた。友だちが新しい遊び方をしていると、そばに近付きじっと観察したり、真似をするなど、感触への興味が自然と友だちとの関わりへと広がっていった。保育者が「〇〇ちゃんのスライム、どう？」と橋渡しすると、互いの遊びを見せ合いながら、「やわらかいよ」「こっちはかたい」と、材料の量によって変わる感触の違いを言葉で伝え合う姿が増えていった。

③ 他児と協力したり思いを伝え合う

友だちと寒天を作る活動や、乾いた小麦粉粘土への色塗りでは、「まぜていい？」「ここ持ってて」「いっしょにやろう」など、相手に気持ちを伝えながら関わる姿が多く見られた。

一人では難しい場面でも、友だちの様子を見て動きを合わせたり、保育者に「できない」「てつだって」と気持ちを表現し、援助を受けながら活動を進める姿が育っていった。

完成した寒天や色の付いた粘土を見て「〇〇ちゃんとつくった」と満足そうに伝える姿から、友だちと一緒に取り組むことへの喜びや、思いを共有する楽しさを感じている様子がうかがえた。

感触遊びを通して、自分で考えて形を作り、色を塗る、という発達を養えることも出来たが大きな成長は活動を通して、子どもたち同士の会話の量が増えたり、保育士との会話の内容が明瞭になってきたり、他者の気持ちを知ったり、受け入れられることが出来ることが増えたり、人間関係への変化も大きかった。幼児クラスへと進級し、自分が！だけではなく一緒に保育園で生活する他者と折り合いをつけながら過ごすことの大切さや必要性も知らせていける活動を考え、環境アプローチの一貫に感触遊びを継続していけるようにする。